

佳作賞

「色にさわる」

『とぼす』54号

今野奈津子氏

今野奈津子（こんの・なつこ）

一九四二年三月二十五日大阪生まれ。京都市在住。

立命館大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了

「時のなかに」で第一回日本海文学大賞（小説部門）奨

励賞受賞

『エミリ・ディキンソン 愛と死の殉教者』（評伝）（創

元社）

『エミリ・ディキンソンを読む』（思潮社）

『エミリー・ディキンソン わたしは可能性に住んでいる

』（評伝）（開文社）

『詩集 ジャック アンド ベティ』（書肆季節社）

「とぼす」同人

「色にさわる」

退職して三年が経ち、貴子は七十歳になっていた。その間入院をしたり、友人からも大病した知らせが届いたり、死を身近に感じる歳になったことを強く実感した。そして残り少ない人生を、この家で生きた、と思えるような時間を一日でも長く持ちたいものと願うのだった。

そんな時、色彩感覚の鋭い塗装工と出会い、家の改修を決意する。達磨のような親方と背高ノッポ、二人の若い塗装工は塀の補修に取り掛かる。初日から、若さあふれる職人のリズムが違う、速度が違う仕事ぶりに、貴子は振り回されそうになっていく。しかし少しずつ、家を色で飾る塗装の仕事に興味を持つてくる。

親方は、嫁ぎ先に残してきた息子と同じ年頃ではないかと思う。

貴子は結婚したものの不幸で、会社で出会った幸一への愛に走った。夫が離婚に同意しなかったので、当時三歳だった息子を残して、家を出た。

しかし幸一との生活は長くは続かなかった。交通事故で突然逝ってしまったのである。幸一との思い出が詰まった家を出て、貴子は小さなアパートに移る。そこは暗い色のカーテンや寒色で覆われた空間だった。しかしやがて悲し

ることも分かった。塗装で、家は森にも、マンションは花にも変身することを目の当たりにするのだった。

足場が組まれ、緑の覆いが貴子の家を包むと、道行く人からいろいろの声が聞こえてくる。歳を取っての改修は無駄で、老人ホームに入った方がいいとか、若いツバメでもかこうのかという冷やかしまで耳に入るが、貴子は住みたい家の色を探すのに没頭する。親方やノッポからは、最新の色見本やカラー写真の載った建築の雑誌が持ち込まれ、インターネットのサイトでも調べることができると言われる。その膨大な資料に貴子は圧倒され、混乱し、疲れ果てる。

そんな時、いつもミルクココアを飲んで一休みしていることに、貴子は気が付いた。幸一と過ごした温かい時間、幸一と飲んでいたものだった。外壁は下をミルクココアの色、上は淡い白、ミルク色のツートンにすることに決定。

「色にさわり」続けた改修工事で、家の帽子と服が決まったところで、最後に、家に履かせる靴は、庭。そこに色とりどりの花を咲かせる花壇とミニ野菜畑を作る。いよいよ、貴子の出番である。まだ少し寒いのが、春告げ鳥も間もなく来るだろう。

みから立ち直り、幸一と約束した、へ退職後は田舎に住み、花や野菜を作る生活をしたい」という夢を果たすために、郊外に小さいが土地付きの中古の家を買った。まだ会社勤めをしていた四十八歳の時である。

傷んだ家の改修は、風呂のタイルが剥げかけているのを見つけたノッポの勧めで、風呂も床と壁のタイルを新しい色で貼り替えることにする。タイルや目地の色を決めるために、スーパーやホームセンターなどタイルが貼ってあるトイレにまで出かけてみる。友人や近所の人にも訊ねてみるが、それでも決めかねる。色を決めることは、いかに生きるかを問われているような気がするところまで追いつめられて、ついに、自分の好きな色のグラデーションを楽しむことだと気が付くのだった。

屋根瓦も塗ってもらうことにする。貴子の色に対する気持ちの変化を見抜いたのか、親方は今流行りのツートンに塗ってしまう。黒と焦げ茶に塗られた新しい屋根を見て、不快感を示すのではなく、楽しいと思う貴子がいた。

屋根が家の帽子なら、外壁は服に当たる。激しいヒビ割れの補修をした箇所だけでなく、思い切って、家の周囲全部の壁を新しい色に塗ってもらおうと思う。何色の服を着せるか。ノッポの運転で親方の塗装した家々を三人で見回す。貴子も自転車を出かけていく。家には多くの色が使われており、壁の素材、塗料の種類によっても違って見え